

# 泣くな赤鬼

## なるとDeシネマニュース

第33回 上映会 11月9日(土)  
うずしお会館 2F



### 特別寄稿 「先生だから重松清」

学校の先生になって、一番つらかった思いではなにか。十数年前、高校の教壇に立っている同い年の友人に訊いた。僕も彼も四十歳になるかならないかの頃だった。

答えはすぐに返ってきた。

「そりゃあ決まっているさ、教え子の葬式に出たときだよ」

いわゆるヤンキー揃いの学校に勤務していた彼は、卒業生を一人、バイクの事故で亡くしている。

葬儀に参列した彼は、遺影に手を合わせ、そして心の中で詫言ったのだという。

「俺が責任を感じる筋台いなんてないんだけれど、やっぱり……」

おまえにもなにもしてやれなかつたなあ、悪かつたなあ、と謝った。

卒業まで手を焼いた生徒だったから、というわけではない。事故死という突然の別れだったからというのではない。

「どんな生徒でも、どんな亡くなり方でも、同じだよ。もつとなにかをしてやれたんじやないかと思つて、なにもしてやれなかつたんだなあ」と悔やむんだよ、先生は」

友人のその言葉から、短編小説『泣くな赤鬼』は生まれた。

教え子のあいつのために、もつとなにかをしてやれたんじやないか。

映画『泣くな赤鬼』にも、同じ問いは確かに響いている。赤鬼の声が聞こえる。せつなく、苦く、けれども力強く、堤真一さんなんだからそれが原作者としてうれしい。

小説版『泣くな赤鬼』を書いているときにも思っていたことなんだが、本を閉じたあと／映画館を出たあと、読んでくれた人／映画を見てくれた人、一人ひとりの胸に、自分自身が教わった先生の顔が浮かんでいてほしい。

自分が亡くなつたら、あの先生、悲しんでくれるだろうな。

そんな先生が思いでの中にいる人生は、きっと、幸せなのだと思つて。

友人も僕も五十代半ばを過ぎた。定年が見えてきた友人は、その後も何人もの教え子の葬儀に参列したという。

先に生まれたから、先生。

「教え子は絶対に年下なんだから、ずーっと、自分より若い奴を見送らなきゃいけないんだよなあ……」

友人は寂しそうに言った。

「やっぱり、悔やんで、謝つてるのか？」

僕が訊くと、「変わらないよ、それはとうなずいた。あいかわらず寂しそうに、でも少しだけ胸を張って、「先生だからな」と笑った。

# THE ORIGINAL

【原作】重松 清

『せんせい。』所収「泣くな赤鬼」(新潮文庫刊)

1963年3月6日生まれ、岡山県出身。

出版社勤務を経て執筆活動に入る。91年『ビフォア・ラン』でデビュー。

99年『ナイフ』で坪田譲治文学賞を、『エイジ』で山本周五郎賞を受賞。

01年『ビタミンF』で直木賞、また10年には『十字架』で吉川英治文学賞、14年『ゼツメツ少年』で毎日出版文化賞を受賞する。

現代の家族を描くことを大きなテーマとし、話題作を次々と発表している。

## STORY

城南工業高校野球部監督・小淵 隆(堤真一)。陽に焼けた赤い顔と、鬼のような熱血指導で“赤鬼先生”と呼ばれ恐れられていた。その厳しさで、甲子園出場を目前にしながらも夢に破れ、10年の月日が流れた今は、野球への情熱をすっかり失っていた。

ある日、診察を受けた病院で「先生、よお先生! 赤鬼先生!」と懐かしい愛称で呼び止められた。「おおー、やっぱり。俺のこと覚えてる?」。声の主は、茶髪にピアス、柄シャツの胸をはだけ、ふんぞり返って座る男、かつての教え子・ゴルゴこと斎藤智之(柳楽優弥)だった。嬉しそうに笑いながら隣の可愛い女性・雪乃(川栄李奈)を「カミさん」と少し照れ臭そうに紹介し、妻と息子・集と幸せな家庭を築く立派な大人に成長していた。これがゴルゴとの10年ぶりの、思いがけない再会だった。

そのゴルゴが末期がんで余命半年であることを知らされる。辛い現実を突きつけられた赤鬼の脳裏に、あの頃の記憶が蘇った――。

「俊足好打の三番バッターとして恐れられ、鉄壁で華麗な守備にも定評がありました! 走、攻、守、三拍子揃った才能に磨きをかけ、チームを甲子園に連れて行きます!」と威勢良く初々しい1年生のゴルゴが城南工業野球部にやって来た。ゴルゴは野球の才能は群を抜いていたが、堪え性がなく、練習に真剣に打ち込む精神に欠けていた。そんな彼を奮い立たせようと、赤鬼はサードのポジションを、努力家の和田(竜星涼)にコンバートする。だがその真意をくみ取れないゴルゴは、「がんばって、先生…、そんなの誰にも教わったことねえのに」。そのまま挫折し、やがて高校も退学してしまった。

あのときかけてやれなかった言葉、気づいてやれなかった思い、厳しくすることでしか教え子と向き合えなかったあの頃の後悔。「俺は、わかったつもりで全然わかってなかった――」。俺はアイツに何をしてやれるのだろう。無力な自分を見つめ、葛藤する赤鬼に、ゴルゴが言った言葉「俺、また野球やりたいな」。赤鬼先生は、ゴルゴの最後の願いを叶えるために動き出す――。

思いがけない再会から、  
彼らの時間がふたたび動き出す



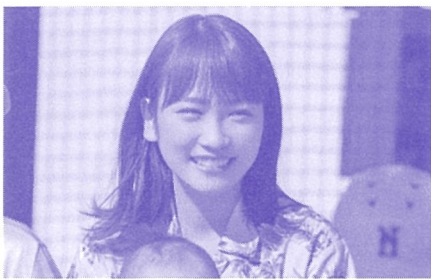
# CAST



**堤 真一** (小淵隆) 教師  
現:県立西高校野球部監督、元:城南工業高校野球部監督  
愛称<<赤鬼先生>>



**柳楽 優弥** (斎藤智之) 赤鬼先生の元教え子  
元:城南工業高校野球部員  
野球部時代の愛称は“ゴルゴ”



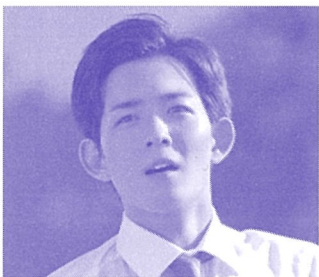
**川栄 李奈** (斎藤雪乃)  
ゴルゴの妻



**麻生 祐未** (小淵陽子)  
赤鬼先生の妻



**キムラ 緑子**  
ゴルゴの母



**竜星 涼** (和田圭吾)  
元・城南工業高校野球部員  
ゴルゴのライバル



**堀家 一希** (斎藤智之)  
高校時代の斎藤智之



**武藤 潤** (和田圭吾)  
高校時代の和田圭吾



**佐藤 玲** (小淵佐知)  
赤鬼先生の娘

# STAFF



**兼重 淳** (監督)  
1967年4月29日生まれ、群馬県出身。  
日本映画学校(現:日本映画大学)卒業後、犬童一心監督  
「眉山ーびざんー」「ゼロの焦点」是枝裕和監督「そして父になる」  
「海街Diary」などで助監督を務める。

# MUSIC



**竹原ピストル**  
主題歌「おーい!おーい!!」(ピクチャーエンタテインメント)  
初の映画主題歌完全書き下ろしとなる主題歌。  
優しく情熱的な歌声と胸にしみる詞が更に感動を  
加速させるー。

“なるとDeシネマ”は今回で33回目を迎えます。こうして長く続けてこられたのも皆さまのお陰と感謝しています。春と秋の年2回上映会を行っています。前回の上映会で、これからもより良いもの、皆さまに喜ばれるものを上映したい！！とアンケートをとらせていただきました。ご協力ありがとうございました。沢山のお声を頂き、今後の活動に生かしていきたいと思っています。紙面の都合上ご意見をまとめさせていただきました

### 2019年「空飛ぶタイヤ」鑑賞時のアンケート集計187名回答

意見や内容 (79名記入)			
映画内容が良かった。	17名	いい映画を選んでくれている	6名
いつも楽しみです	16名	又、参加したい	5名
いつもありがとう(ご苦労様)	12名	感謝しています	3名
この上映会を続けて欲しい	7名	感動して元気になれる	2名
近く(鳴門市)で便利	7名	面白かった	2名



#### ☆≡「空飛ぶタイヤ」について

- 作品のカラーが変化していて選者が代わった様。男性も興味ある内容で楽しみ。
- 今日の作品内容が良かった。TVで推薦していたので見たかった。
- 今日の新聞でリコールの記事を読んだばかりなので深く考えさせられた。アカデミーにノミネートされていたいい作品でした。良かった。
- 企業の持つ特性と人間としての良心の葛藤が明確に描写され、大変感動的でした。
- 素晴らしい俳優陣で見応えがあった。
- 好きな俳優さんだったので昼と夜2回楽しみました。



#### ☆≡その他のご意見

- 映画館と同じ大きさで見たい。
- 「万引き家族」も見たい。
- 洋画も欲しい。
- 大人から子供まで幅広いジャンルのもの、例えば宮崎作品などもいいのではないかと。
- 開場を早めにしてロビーで待つようにして欲しい。老人が多いのでトイレや食事ができるように。
- 出演者と配役の一覧が分かると助かる。
- 字幕付きとナレーションが良かった。
- 開場前に行列ができてその光景に圧倒。
- 字幕があるのは見にくい。
- 聾唖の方にも配慮した映画会だ。



#### 会場変更について

鳴門ではシネマの上映会をするための適切な会場がありません。16年前、鳴門市文化会館には上質の映写機が備わっているとのことで上映会を続けてきましたが、デジタル化とともに映写機を使わなくなり、経費もたくさん掛かるようになりました。また、上映会を開始した頃より、上映会に参加して下さる方も高齢化して少なくなり、採算をとるのも難しくなってきました。また、鳴門市文化会館の予約が難しくなっていることもあります。

しかし、私たちは皆さまに上質の映画を定期的にこの鳴門で鑑賞していただけるように！と頑張っています。

今回の上映はこのような理由が重なりまして、「うすしお会館」での上映会になりました。次回はまた鳴門市文化会館で2020年5月30日(土)を予定しております。どうぞ“なるとDeシネマ”の上映会にお友達やご家族を誘ってご参加をお願いいたします。